

日詰明男

Akio Hizume



私たちの記憶はどのように構成され、どのように呼び出されるのでしょうか。

それはコンピューターのそれとは全く異なる形式でしょう。

私たちは記憶に座標(アドレス)を用いません。

私たちの記憶は、ニューロンネットワーク上に、分かちがたく、

ホログラフィックに、偏在しています。

同様に、この実験都市で番地(アドレス)を付けることはあまり意味がありません。

私たちはイメージの連鎖を手繰ってすみやかに目的地へ達します。

ここでの人々の動線は、私たちが脳内で記憶を呼び出す仕方に

似通っていることでしょう。

それは竹の地下茎(リゾーム)のネットワークとも通底しています。

中心はどこにもない、あるいは至る所が中心である。

この実験都市で生活を続ければ、記憶だけでなく、

やがて新しい「思考の鋳型」ともなるでしょう。

それが「ニューロ・アーキテクチャー」と命名した所以です。

大学で建築を学んだ後、25年来、自然界の様々な形の中にあられる不思議な比率、黄金比に基づくフラクタル構造を、造形や音楽で表現する仕事を続けている。主な作品に、《民主主義的階段》(U.S.A / NZ)、《黄金比の茶室》(コスタリカ / U.S.A. / 静岡)、《フィボナッチ・ケチャック(たたけたけ)》など。著書に『生命と建築』(1990)、『音楽の建築』(2006)がある。

1960年 長野県長野市生まれ
1987年 京都工芸繊維大学建築学科卒業
武蔵野美術大学特別講師(2008-)、
龍谷大学理工学部客員教授(2009-) / 静岡県榛原郡川根本町在住

1994年 「眼の宇宙ーかたちをめぐる冒険」兵庫県立近代美術館(兵庫)
2006年 「美術館ワンダーランド 夏の思い出 今を生きる」安曇野市豊科近代美術館(長野)
2008年 個展「星ボックリ茶寮」京都芸術センター(京都)
2010年 「黄金比のカタチ」静岡市美術館(静岡)

黄金比と竹の実験都市

日詰明男さんは、1960年生まれで大学で建築を学んだ。幾何学、特に“黄金比が生み出す厳密な造形”の研究をつづける異色の研究者、造形作家である。9年前から川根本町に暮らしている。世界の学会に出かけ、毎年「バンブーストック・フェスティバル」を彼の地で開くなど、さまざまな活動をしている。

黄金比とは、1.618033989...と無限に続く無理数で、 $X=1+1/X$ という2次方程式の解である。この不思議な比率が、生命や自然の造形のなかにさまざまなカタチであられる。例えば、多くの植物の葉のつき方は黄金比に近似するという。それはそのカタチが、太陽の光を最も効率よく受け、荷重を最もバランスよく分散させるからだという。黄金比は自然界のさまざまな美しいカタチにあられる。

「黄金比は、工学的に見ると最もシンプルなフラクタル構造であり、最高の攪拌効率を有する」一 個別具体のカタチの研究を通じてこう確信するに至った日詰さんは、そこに数理工学的な意味にとどまらず「来るべき論理形式の宝庫」を見る。それはリゾームやフラクタルという概念を包摂し、そこには「今後数千年にわたって人類が取り組むべき課題の殆どが潜んでいる」という。(『音楽の建築 日詰明男論文集1990-2005』Star Cage, 2006年)

五角形は黄金比の基本的なカタチである。五角形を基本とした建築と街区による街は、四角いビルと直行する道路で出来た近代都市に代わるべき、来るべき“未来の都市”である。それは直行する四角四面な街と違って、常に複数のルートが確保され、表裏なくスラム化しにくい街だという。そんな黄金比で出来た街に住む未来の社会はきっと、速さを競う強欲資本主義を捨てて、共生という持続的な効率性を手にしていることだろう。速さは瞬間的な効率だが、生命は持続する時間、有機的な全体の中で最大の効率を追求する原理である。黄金比はその優れた解だろう。

竹もまたサステナブル(持続的)な素材である。地下茎(リゾーム)で遅しく増え、中空の真っ直ぐな茎は、軽くしなやかで、柱にも、食器にも、編めば籠にもなる。今回は、静岡で竹林の利用促進に取り組む「Groomしずおか」の皆さんにお願いして、市内近隣の中山間地の竹を切り出して頂いた。その竹を素材に、会期中、多くの市民の皆さんと共同でどんな街が出来上がるか、楽しみである。参加は自由、誰もが好きなときに参加して創意工夫を発揮する、これもまた未来の共生の街にふさわしい。夕方には、竹を叩いて黄金比のリズムを刻む「たたけたけ」を練習し、会期末の「バンブーストック・フェスティバル」(11/19, 20)で盛大に合奏される筈である。フェスティバルには、「黄金比のまち」を舞台にオルタナティブスペース・スノドカフェがプロデュースする地産地消のマルシェ(屋台)が登場、是非、皆さん、ご参加を!

以倉新(静岡市美術館学芸課長)